

〔24〕 フィリピの信徒への手紙 3章 10-11 節  
「キリストの復活の力」

《1》

先週はイースター礼拝でした。主イエス・キリストの死からの甦りを共に祝い、喜びました。

そして、今朝の個所においても、主の復活のことが書かれています。これは別にこのようになるように調整したわけではなく、フィリピの信徒への手紙を順に読み進めてきた結果、このようになったということです。

信仰があるなら、世の中に偶然ということがあるなどと考えることはできません。すべてのことに、主のご計画と御旨が現われています。今朝もこうして、先週に引き続き、主イエス・キリストのご復活から御言葉に聞いていく。これが主の御旨であったということでしょう。

初めの個所は、「私はキリストとその復活の力とを知り」とあります。キリストを知る、ということでは、既にほんの少し前の8節で、こう言われていました。

「そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに、今では他の一切を損失と見ています」。

今朝の個所は、この8節の御言葉にさらに説明を加えている、と見ることができますでしょう。パウロはキリスト・イエスを知りました。知って、救われて、今確かな救いと命と喜びのうちに、生きています。

このことについて、今朝の御言葉では、キリストを知ることと言うのは、何よりも、主イエス・キリストの復活の力を知ることなどだ、ということを描くのです。

知ることの中心にあるのは復活です。復活を知らない、或いは知っていても単に頭の中で知識として知っているだけで、自分の中で血肉となっていない、ということがあるとしたら、それでは本当に主イエス・キリストを知っていることにはならない。

もっとも、ここでは復活に重点を置いて語っていますから、十字架のことは出てきませんが、勿論、十字架は復活と並んでキリスト教信仰において欠かすことのできない中心的な事柄です。

両者の関係は、復活があつてこそその十字架であり、十字架があるのだから復活があるのは当然だ、という関係と言ってよいでしょう。

二回前の説教では、第一コリントの1章から見ました。そこで私は、十字架をただ暗く、悲惨なことだというだけで考えるのは、よくないということを言いました。十字架は神さまの力であり、知恵であるからです。

十字架は復活と堅く結びつき、両者相俟って、罪ある私たちのその罪を赦し、私たちを神さまの御前で、確かに、力強く生きる者としてくださいます。そこに神さまの義と愛とが溢れています。

さて、ここで復活の力とあるのですが、この「力」という言葉は後に英語などで、この言葉からダイナマイトという言葉が作られたように、とても爆発的な力、ということ。ギリシア語で、ディナミスと言います。

喩えて言えば、主の十字架によって導火線に火が付きました。シュルシュルと燃えながら爆弾に近づいていきます。

そして遂に、主イエス・キリストのご復活によって、死に対する勝利が爆発的な勢いで現された。主の命は、爆発的な力をお持ちです。それは、信じる者のうちに、今も、そして永遠に生き続けるのです。

この間の事情を告げるローマの信徒への手紙 6 章 4～8、10～11 節を、少し長いのですが、お読みしましょう。

「私たちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に生きるためなのです。もし私たちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。私たちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。死んだ者は、罪から解放されています。私たちはキリストと共に死んだのなら。キリストと共に生きることにもなると信じます。…… (1 節略)

キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい」。

## 《2》

次にパウロは、「主の苦しみにあずかって」と言います。

そのように主の苦しみにあずかるとは、どのようなことをいっているのかと言いますと、さらに「主の死の姿にあやかりながら」と述べています。

パウロが今置かれている状況が、主イエス・キリストの苦難と十字架によく似ている、同じようだ、ということでしょう。

「あやかる」とは、適合する、一致する、順応するといった意味です。極端に言えば、主イエス・キリストの十字架の死と苦しみは、今やパウロにおいて、引き続き存在している、と言ってもよいでしょうか。

パウロは今、監獄の中におり、明日にも殉教の死を遂げるかもしれない最中にあります。パウロの苦しみの意味を、御言葉から聞いていきましょう。

ローマの信徒への手紙 8 章 29 節「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは御子が多くの兄弟の中で、長子となられるためです」。

前もって知っておられた者たち、つまり救いへと選ばれている信仰者たちですね。彼らを御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められた。

主イエス・キリストが十字架の死と苦しみを受けられたのですから、それに続く信仰者たちも、まったくイエスさまの十字架の死と同じ死を死ぬことはできないでしょうが、それと似たような苦しみを受ける。それを避けることはできない、ということ

になります。

苦しみは、人それぞれに違うでしょう。人間的に見れば、まさにそのとおり、いろいろな苦しみがあるのだと思います。

しかし、信仰をもって見るならば、少し違ってきます。私たちが信仰をもってこの世で生きるときに受ける、どのような苦しみ、また死について、その意味が違ってきます。

信仰者がこの地上で受ける苦しみと死。それはどのような形、姿のものであろうと、根本的なところで、それは主イエス・キリストの苦しみと死に、つながっていくものなのだという事です。

このように考えるとき、私たちは、一瞬どきっとして、少し意味が採りにくいと感じてしまうかもしれない御言葉も、よく理解できます。

コリントの信徒への手紙二 4 章 10 節に、「私たちは、いつもイエスの死を体にまっています」とあります。イエスの死を体にまっています。

なぜ、このようなことが言われるのでしょうか。それは、今朝の御言葉が告げているように、主の苦しみにあずかり、その死の姿にあやかることによって、私たちは自分の復活に達することができるからです。死と苦しみ無しには、ありえないのですね。

第二コリントの御言葉は、先ほどの続きで、こう述べています。「イエスの命が、この体に現れるために」。

死ななければ命がない。つまり古い自分が死んで、新しい自分が神さまに向かって生きようになるのです。それは、さながら私たちが、主イエス・キリストの死と命にあやかっていることに他ならない。

それで、ここからも、ガラテヤ書の有名な御言葉；信仰者と主イエス・キリストとの神秘的結合と呼ばれる御言葉も、新たな光のもとで聞くことができます。

ガラテヤの信徒への手紙 2 章 20 節「生きているのは、もはや私ではありません。キリストが私の内に生きておられるのです。私が今、肉において生きているのは、私を愛し、私のために身をささげられた神の子に対する信仰によるものです」。

もうひとつガラテヤ書から、御言葉に聞きましょう。キリストと堅く結ばれ、十字架の苦しみと死において、また復活と命において、主と私たちとが、同じく一つものとされている中で、私たちはこの世に対して、どう生きるのかということです。

ガラテヤの信徒への手紙 6 章 14 節「しかしこの私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世は私に対し、私は世に対して、はりつけにされているのです」。

私たちには、キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはならない。ここも敢えて言えば、主イエス・キリストの十字架と復活のほかに、誇るものが決してあってはならない、ともなるでしょう。

この世は私に対して、はりつけにされている。主イエス・キリストの十字架によって、他ならないこの世がはりつけにされている。この世というのは、古い、肉に支配された世ですね。それは死んでいる。無力にされている。つまり、自分が生きるのは、もはや決して古い罪の世界のためでもなければ、また、この世の古い、罪の規準に従

って生きることでもない。そのことがはっきりした。

また、私は世に対して、はりつけにされている。私自身、古く、罪深いこの世に対しては、死んでいる。そんな世界とは一切関係のない者となっている。

それで、フィリピの信徒への手紙においては、このような言い方で、同じことが述べられていました。

フィリピの信徒への手紙 3 章 8-9 節「そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりの素晴らしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見做しています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです」。

### 《3》

最後に 11 節です。「何とかして死者の中からの復活に達したいのです」。

この「何とかして」を、パウロの謙遜の言葉とする考え方もありますが、しかし、単なる謙遜ではないでしょう。

死者の中からの復活に達する。このことは、自分自身の力によって成し遂げられることではないはずです。

神さまの恵みによってこそ、これは達成されるのですから、それで、何とかして、という言い方になっているのではないかと思います。

信仰者は、信じたその時に、既に主イエス・キリストと共にあって復活の命の恵みのうちに生かされています。

しかしパウロはここで、死者の中からの復活に達したい、と言うのです。これは最後の時の、最終的な復活の命の恵みによって生かされることを、念頭に置いているということでしょう。

ですから、いわば私たちは皆、信じるなら今、復活の命に生かされている。これは確かです。

しかし、完全にそれが達成されるのは、最後の時のこととなる。

なぜ、このようなことになるのかと言えば、それは、私たちにはたとえ罪赦されたとはいえ、罪の残滓が残っているからです。完全に聖くはされていないのです。

もちろん、私たちは生きている途上において、日々、以前よりも、より聖くされていっているということがあります。しかし、完全に聖くされることはない。それは信仰者が地上の生涯を終える時のことです。

そして、死者の中からの復活に達するという、キリスト者最大の喜びであり、慰めである時は、終わりの時まで待たなければならない、ということになります。

なお、罪の残滓が私たちにはある、ということに関して、ガラテヤ書ではこのようなことが述べられています。

ガラテヤの信徒への手紙 5 章 16 節以下「私が言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは霊に反し、霊の望むところは肉に反するからです。肉と霊とが対立しあっているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができな

いのです」。

そして、この後、肉の業は明らかですと言って、それが具体的に上げられています。

全部は挙げませんが、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術…と続きます。

これらは、信仰のない人たちがこのようなことに陥っているというだけではなく、信仰者においても、もし肉の望むことに従うなら、同じようにそのようなことに陥ってしまう、と言っているわけです。肉の欲望を満足させかねない罪の残滓がある、という実情に対して、パウロの願い・祈りがあります。

どうか、主イエス・キリストの復活の力を知り、苦しみにあずかって、主の死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したい、というのです。それはパウロ個人の思いであるし、すべての信仰者に対しても、そうあってほしいと願っている、ということでしょう。

思い切って単純に言えば、脱落者になってはならない、ということですね。

主の復活の力を知り、そして主の苦しみと死にあずかる。霊の導きに心から従いつつ、そのように歩むとき、私たちが主イエスの命に生かされ、また愛と恵みに生かされていることは、確実です。

たとえ私たちがどのような状況にあろうとも、霊に導かれて、主の復活の力にすべて委ね、主の苦しみと死に、全身全霊を傾けて生きるなら、私たちは今も、そしていつまでも、堅く主の御手に捕らえられ、主の命に生かされ、主の愛と恵みに生かされています。

これが揺るぎない真実です。最後に、主イエス・キリスト、また父なる神さまの、私たちに対する愛の確かさを高らかに歌っている御言葉をお読みして、終わりにします。

ローマの信徒への手紙 8 章 38-39 節「私は確信しています。死も命も、天使も支配するものも、現在のものも未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも低い所にいるものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです」。

2022 年 4 月 24 日 朝拝

恵みと憐れみに富みたもう天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

キリストの復活の力に、今も、そしていつまでも生かされている私たちです。

どうか、主の苦しみにあずかり、その死の姿と同じくなるまでに、私たちが主イエス・キリストと同じ一つとなって、死者の中からの復活という、最大の喜び、恵み、慰めに生きる者とされますように。

どうか、御霊の導きがこれからも、そしていつまでも豊かにありますように。

神さまの私たちに対する愛は、どのようなことがあっても私たちを離れることなく、変わることがないと約束されています。堅く、主の恵みのうちに、留まる者とさせてください。御霊がそのように助けてください。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司